

中学美術と美術館の連携による鑑賞教育の方向性

How Art Appreciation Education at Junior High Schools can be Coordinated with Art Museum

桑村佐和子 KUWAMURA Sawako
西澤 明 NISHIZAWA Akira

1. 生涯学習のための鑑賞教育

生涯学習社会にあって、美術館は人々が生涯にわたって、いわゆる「美術作品」に触れることのできる機会を提供している。一方で、人々が生涯にわたって美術に親しむための基礎を作るのが学校の役割である。他分野でも社会教育と学校教育の連携・協力は広く求められてきており、美術館と学校においても同様である。それは、両者の連携・協力によって、それぞれの質の向上が期待されるからである。それぞれの強みを生かしつつ、補い合うことができれば、その可能性は高い。

ところで、人々にとって美術館の敷居は必ずしも低くはないようである¹。日本では美術館にはあまり行かない、または行ったことがない家庭は多く、美術館に行くという習慣は、高所得・高学歴の親のいる家庭で作られ、その子どもに引き継がれる傾向があるともいわれている。美術館での子どもたちを対象としたワークショップなども盛んに行われるようになってきたが、幅広い子どもたちに美術館に親しんでもらうためには、学校との連携は不可欠であろう。²

一方で、学校の美術館利用の現状を見ると、地理的、時間的制約があってなかなか利用することができない。せっかく美術館に来て、美術館での過ごし方の指導をし、集合時間を確認するだけで、児童・生徒達の学習への指導はない場合がある³。それでは、一過性のイベントとして終わってしまい、深く鑑賞することができないことも指摘されている。²

現在、そのような状況を変えるべく、各地で学校

と美術館の連携・協力が模索されているが、特に、中学校では、美術教員が学校で1名ないし非常勤講師しかいないことがあり、連携・協力がより難しいものとなっている。本稿では、実践を通してその可能性を確かめるとともに、学校と美術館の連携・協力の課題を明らかにし、今後の連携・協力の方向性を考察する。そのためにまず、学校と美術館のそれぞれの立場で、鑑賞教育と両者の連携がどのようにとらえられているのか、またその連携・協力にはどのようなものがあるのかを見ておくことにする。

2. 中学美術における鑑賞教育と美術館との連携

中学校に限らず、小学校～高等学校での図工・美術科教育では、表現活動と鑑賞活動を行うこととされている。表現活動は自分の心情や考えをイメージし、造形的に具体化する活動である。鑑賞活動はよさや美しさ、心情や考えを感じ取り、味わう活動である。

これまでの中学美術は、どちらかといえば、表現活動に重きを置いてきたと言われている。実施されてきた鑑賞活動も作者・作品名、その解釈を暗記するような知識理解に偏ったものであったという指摘がある。上野行一は、人々が美術作品に対して時にとる態度として「知識吸収派」「陶醉派」「諦め派」と言えるような態度があり、このどれもが本当には絵を見ていないと指摘している。また、そのような態度は学校の美術科教育の鑑賞教育の影響であり、その典型である「知識の伝授」「感動の強要」「指導の

放棄」とそれぞれ対応しており、そのどれもが「成人してのち、美術文化に向き合うことができる教育である」と言いがたい」と述べている⁴。そのような反省をもとに、最近では、生徒が互いの作品を鑑賞しあったり、対話による鑑賞やアートカードを使ったりなどの新しい鑑賞教育が提案され、実践が蓄積され始めている。⁵

そのような中、鑑賞教育の質をより高めるために、美術館との連携を模索する動きは自然な流れかもしれない。学習指導要領（平成20年3月改訂、平成22年11月一部改正）でも、中学美術の鑑賞教育で配慮する点の一つに、「各学年の「B鑑賞」の題材については、日本及び諸外国の児童生徒の作品、アジアの文化遺産についても取り上げるとともに、美術館・博物館等の施設や文化財などを積極的に活用するようにすること」を挙げている（第2章第6節「美術」）。

また、学習指導要領解説では、「地域によって美術館・博物館等の施設や美術的な文化財の状況は異なるが、学校や地域の実態に応じて、実物の美術作品を鑑賞する機会が得られるようにしたり、作家や学芸員と連携したりして、可能な限り多様な鑑賞体験の場を設定するようにする。」とされている。学校や地域の実態、あるいは条件が違うことを認めつつも、美術館の積極的な活用を求め、学芸員との連携を推奨している。

3. 美術館における学校との連携の位置づけ

一方の美術館は博物館であり、代表的な社会教育施設の一つである（美術系博物館）。その機能には、他の博物館と同様に、資料収集・整理・保管、調査研究とともに、それらの成果を活用し、館内外で教育活動を行う教育普及活動がある。具体的には、館内活動としては常設展、企画展、講座・教室の開催、情報提供、館外活動としては移動展示、見学会、観察会、写生会、調査活動があるが、それとともに学校との連携が求められている。博物館法（美術系博物館を含む）でも、博物館の事業として位置づけられ、さらに項を立てて学校教育への協力が求められてい

るのである（第三条「博物館の事業」第一項及び、第二項）。

美術館には「作品そのものだけではなく、研究によって蓄積された専門知識などの情報、教育普及担当学芸員（エデュケーター）や解説ボランティアといった人材、作品鑑賞の理論や方法など、美術をめぐる資源が揃っている。これらの情報・人材・ノウハウといった資源は、連携によって有効に活用することができるようになる」⁶はずである。また、学校における美術教育の充実にとっても、美術館が人々にとって生涯学習の場となるためにも、この両者の連携は意味を持つと考えられているのである。

4. 学校と美術館の連携

学校と美術館の連携にはどのようなものがあるのだろうか。

①美術館で、美術館のプログラムを利用する

基本としては、学校側が美術館に生徒達を連れてきて、展覧会を見せることである。その機会を与えるだけの場合もあるが、美術館の専門スタッフやボランティアによる美術館の説明、展示作品の解説をしてもらう場合もある。さらに、対話型の鑑賞や美術館が作成したワークシートを用いた鑑賞などもある⁷。その際のツールのひとつとして、収蔵作品を使ったオリジナルなアートカードなどを開発し、それに基づいた鑑賞教育を提供している美術館も出てきている。

例えば、金沢21世紀美術館の場合には、その一つとして、金沢市内の小学校4年生全員を学校毎に招待し、ボランティアと一緒にコレクション展を鑑賞する「ミュージアム・クルーズ」がある⁸。作品を鑑賞しながら児童から感想を引き出す等の工夫がみられる。また、この取組では児童に現代アートに触れてもらうだけでなく、児童に再訪してもらえるような仕掛けが用意されており、児童のその後の自発的な美術館利用もねらっている。

学校から美術館に出かける場合は、遠足や修学旅行の一環に組み込まれることもあり、最近では生徒

自身が少人数グループで美術館を訪れて、美術館が提供するさまざまなプログラムを利用する場合もある。高校によっては、生徒が各自で自分の都合の良いときに展覧会を鑑賞し、そのレポートを提出させるところもある。

②美術館が学校に出向く

美術館が作品やワークシートを学校に持っていき、児童・生徒に作品を鑑賞させることがある。岡山県立美術館は、「岡山県立美術館 学校と美術館の連携活性化事業」の一つとして「美術館コレクション活用素材BOX “アート・トラベリング・トランク”」を開発している。この「アート・トラベリング・トランク」には、所蔵作品画像集（30 画像・CD）、「水墨画編・備前焼編」（DVD）、実物大複製の掛け軸、備前焼を理解するための湯呑み（備前焼・萩焼・有田焼）や窯変チップ等のセット、アート・ゲーム（絵札カルタ／パズル）などが納められている。それを学校で使いながら授業を実施するのである。⁹

多様で十分な数の美術作品を、一つの学校の（特に美術科でない限り、学校で一人しかいない場合が多い）美術教員が揃えることは難しく、美術館によるこのような支援は学校教育における鑑賞教育の質の向上に一役買っている。

③教員の研修機関としての美術館

美術館が開催（主催／共催）する、鑑賞教育に関する教員の研修も開催されるようになってきている。さらに、例えば金沢21世紀美術館では、教員研修だけでなく、小学校・中学校・高等学校・特別支援学校の教職員を対象とする「展覧会無料招待ウィーク」も設定している。これは児童・生徒達を連れてくる前に、教員が美術館に親しんでもらい、展覧会の内容を知ってもらうためであり、教科を問わず、すべての教員に機会を提供している⁸。

5. 中学美術と美術館の連携による鑑賞教育の実践事例

それでは中学美術と美術館の連携について、さらに具体的に見ておくことにしよう。以下は、金沢大

学附属中学校と金沢21世紀美術館の連携による実践である。

(1) 実践事例「風景を切り取る 一枠の外の広がり
を意識した対象の観方」¹⁰

①単元の概要

21世紀美術館の常設展示作品「Blue Planet Sky」(James Turrel, 2004)について、現地でキュレーターの説明を伺い、基礎情報の学習後、美術館周辺において、デジカメによる風景写真の撮影を行う。撮影された作品は、プリントアウト後、展示もしくは写真集（あるいは両方）の形式で発表する。

1) 実施学年

第3学年 4クラスの生徒（各クラス約40人）

2) 活動場所

金沢21世紀美術館（石川県金沢市）

3) 活動時間

50分授業4時限分（約230分）。当日は、特別時間割により4回分の授業をまとめて実施した。スケジュールは、学級朝礼後に学校駐車場を出発し、バス乗車・移動30分、ガイダンス（展示作品についての学習）50分、撮影活動50分、休憩20分、まとめ50分、バス乗車・移動30分である。4限目終了前に完全帰校した。

4) 実施日

平成18年10月13日（金）、10月19日（木）、11月24日（金）、12月1日（金）

5) 使用機器

備品デジカメ（Panasonic DMC-LS1）10台

②活動のねらい

対象としたのは、通称「タレルの部屋」と呼ばれ、矩形に切り取られた天井を持つ部屋の空間そのものが表現という作品「Blue Planet Sky」(James Turrel, 2004) である。



本単元では、表現活動の基礎的知識・技能としてしばしば取り上げられる「よく観る」ことを「対象の観方（形、色の美しさの気付き）」、「美しい構図」を「矩形内の構成（トリミングのための大きさ、位置、角度）」と捉え、その育成を図るとともに、それに伴って必要となる「感性の育成」を目指した。

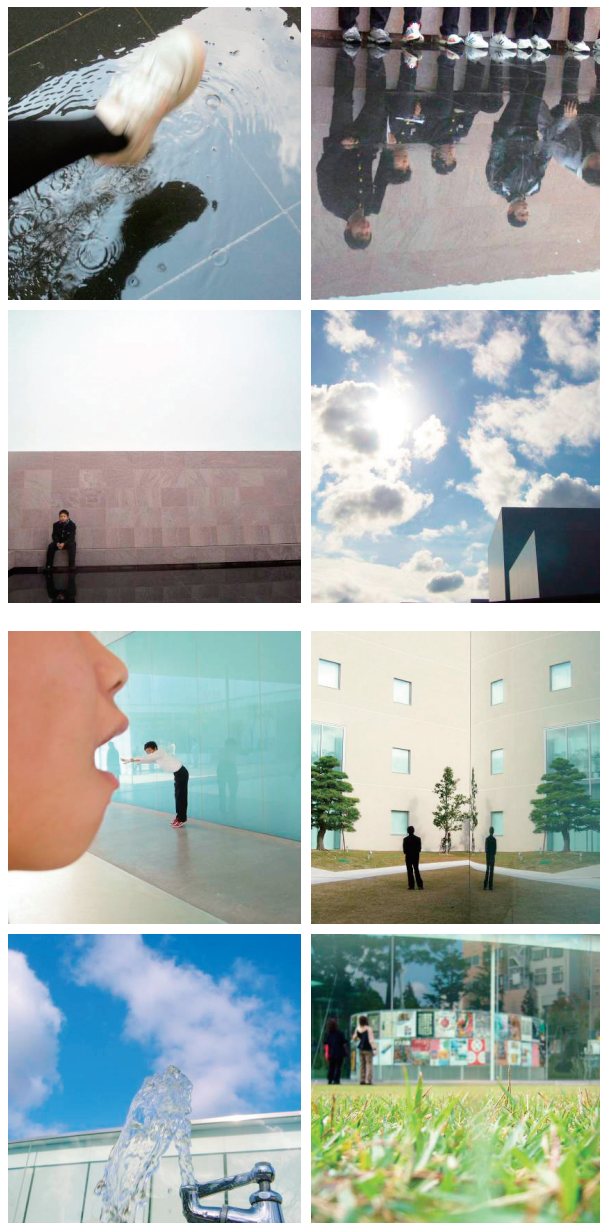
さらに、指導要領においても取り上げられている、美術教育としての「写真」教材の扱い、表現ツールとしての「デジカメ」活用の可能性を確かめるねらいもあった。デジタルカメラおよびカメラ機能付き携帯電話等の隆盛、その使用の低年齢化にもかかわらず、学校教育では、総合的学習における記録撮影等はあるものの、美術の学習教具としての活用を積極的に図る機会はほとんどないように思う。本実践は、美術教育として「写真」にどうかかわるかを探り、自身で撮影活動に取り組むことで今後の生活への応用も可能であり、生活に美術作品、自作品が置かれるよさを味わう心の育成も図ろうと考えた。

また、この作品は美術館の無料ゾーンにあり、い

つでも、だれでもが鑑賞することができる。この実践を通して、身近な美術館にある常設展示作品に対する知識理解とともに、関心を育成することをねらいとした。

③実際の生徒作品

タレルの部屋を参考に、“矩形で切り取る”意識を持たせて撮影した写真は、構図に関する知識習得の学習をしていないにもかかわらず、どれも優れた感性を感じる作品になった。



(2) 実践事例「私が生活する空間 - 日常の風景を、自分を表すデザインで彩る」

金沢21世紀美術館の常設展示であり、「市民ギャラリー」の外の壁面（高さ4.5メートル、長さ26メートルに及ぶ）いっばいに描かれた、マイケル・リンによる作品を用いて、「壁画の色や文様といった要素の観察ではなく、周辺環境をも合わせた場を共有する」ことを理解し、自身の表現活動につなげる。そのため、活動は、美術館と中学校の両方で行われた。

①美術館における活動

実施日：2009年5月14日(金) 13:00~14:00

活動場所：金沢21世紀美術館

実施対象：美術部員（1~3年生55名）

実施内容：当日の活動内容の紹介、個人鑑賞（15分間）、グループ鑑賞（40分間）、今後の活動について紹介して終了。

美術館の活動では個人鑑賞とグループ活動という段階を経て、気づきや感想を丁寧に確認し、共有することを目指した。グループ活動においては、美術館スタッフも鑑賞者の一人として自らの気づきを言語化して生徒たちに伝えることで、生徒達が「美術」や「鑑賞」に対する既成のイメージにとらわれることなく自由な表現活動につなぐことを心がけた。生徒達からは、周囲の空間については「日当たり良く明るい気分になる」といった気づきから「外の庭や、建物の屋上にも作品がある」「白い天井に壁画が映っている」「椅子の絵が動くとき壁の絵も連動する感じ」などの発見が聞かれた。また、壁画部分についても「花や果物など植物の模様である」のほか「模様に繰り返しがある」「模様は和風だが塗り方は洋風」「7色くらいと壁の肌色でできている」などの気づきが語られた。ディスカッションを通して、作品は壁画や椅子といった「モノ」だけではなく、隣接する庭、空の様子、光、ガラス越しに見る人の動きなど、空間と時間が含まれて構成されていることが自覚されたようにみられる。作家が場や時間を読み取ったように、生徒たちも自分をとりまくさまざまな要素を総合して、体験を通じた鑑賞につなげていった。

この5月の美術館での鑑賞活動では、作品についての具体的な知識を与えることや、壁に描かれた具体的な絵画表現にのみ注目させることはせず、壁、床、天井、窓、椅子といった建物や施設、光、匂い、温度、空気の動き、さらに行き来する鑑賞者といった環境も含めた鑑賞活動を行った。生徒たちは空間を「あらためて意識する」ことで、様々なことを感じ、考えたようである。

②中学校における活動

実施日：2009年8月22日(日) 10:00~12:00

活動場所：金沢大学附属中学校

実施対象：金沢大学附属中学校美術部1・2年生

実施内容：美術館での鑑賞活動に続き、「美術館という公共の場の空間に展開する作者（マイケル・リン）の意図」という視点を「学校という公共の場の空間に展開する作者（生徒個人）の意図」に置き換え、学校の校地内、校舎内およびそこに置かれる様々な備品等に、リンの作品のように平面デザインの模様を展開する。

具体的には、以下の取り組みを行った。

- A. 模様を置きたい、描きたい空間、物を探す。
その際、その場所や物が学校においてどんな場所で、自分はその場所にどんな思いを持つのかを説明できるようにする。
- B. その場所に展開したい平面デザインの模様を、自分のプライベートな生活の中から探す。
そのデザインは自分に関わる物だけに限定せず、広く家族や家庭に関わるものから考える。
その際、その模様の説明ができるようにする。

ここで重要なのは、単純に「公共の場に美しい平面作品をデザインし、描く」という造形活動や、そこで完成する造形作品を求める制作ではないという点である。公共の場に個人的な表現が置かれることで生じる自分自身の感覚、第三者が覚えるさまざまな感覚、そして自分自身と第三者のその感覚の違いといった、視覚的な「造形要素」によって発生する

「感覚」もまた作品の一部であるという意識である。これは、現代美術の作品における表現の一つのあり方であり、その感覚を意識することが、本実践における鑑賞活動だとも考えられるのである。

しかし、抽象的で高度な課題であることから、戸惑いを覚えている様子や、考えがまとまらない様子が見られ、活動がなかなか進まなかった。そこで、生徒たちの活動の方向付けを支援するための試みとして、美術館における鑑賞活動で協力していただいた美術館スタッフを学校に招き、生徒たちに学校を案内させ、各場所の説明や自分の思いを語らせる取り組みを行うことにした。

全体の顔合わせと活動内容確認の後、4人の美術館スタッフそれぞれに7、8人の生徒たちを組み合わせさせた4つのグループに分かれ、自己紹介等の後、グループ単位で校地内を巡った。生徒たちは、自分たちが毎日の生活でよく知っている学校という空間を案内したのだが、案内し、説明するために、普段何気なく過ごしている空間を意識的に見ることになり、新鮮な感覚を覚えたようである。1時間程度の巡回の後、グループごとで振り返りを行い、さらに全員で感想をシェアリングした。



8月に行ったこの活動は、学校の風景について改めて意識することになり、「A」（前掲「A. 模様を置きたい、描きたい空間、物を探す」のこと。以下、「A」「B」などは同様。）の取り組みが行いやすくなったようである。その後、生徒たちはそれぞれに活動を展開したい場所や物を決め、「B」の取り組みについても、同様の感覚でスムーズに入っていたようである。

生徒たちが公共の場とプライベートなデザインを決定したのを受け、

C. 「A」に「B」を展開した様子をイメージし、それを視覚化する制作を行う。

活動の当初に行った美術館との打合せでは、視覚化の制作方法についてはスケッチ、イラストや立体模型など、自由に行わせようと考えていたが、実際に行ってみると、描いたり、作ったりといった生徒たちの基礎的な表現技術が低く、なかなかうまくいかないという問題が明らかになった。そのため、「A」については比較的作業が簡単なスケッチで行うことにし、「B」については、そのスケッチに実際に描きこむだけでなく、デジカメで撮影した画像を印刷、貼り付けする方法も行うことにした。



さらに、完成したイメージスケッチに「A」、「B」で考えた説明を、文章で書き加えることで、コンセプトがより具体的に明らかになるようにした。実際の場所と生徒の描いたイメージスケッチの例を以下に示す。(上より階段、図書室の貸し出しカウンター机、生徒玄関の下駄箱側面)



生徒たちの書いた説明文の一例として、図書室の貸し出しカウンターを選んだ生徒のものを示す。
 選んだ場所：いつも友だちとしゃべったり、勉強を教えあったりしている場所。

選んだ図柄：すごく感動した本の表紙と、小学校の時に作ったバックの柄。

実現したら：私の好きな本の表紙を図書室に入ってすぐの机に描くことによって、より多くの人に本への関心を持ってもらえて、人がたくさん集まる明るい図書室になると思う。

この生徒だけでなく、その他の生徒たちについても、予想以上に本質を捉えた文章が多く、本実践において指導者側が期待した、単なる「造形要素」だけではなく、そこから受ける「感覚」もまた作品の一部であるという鑑賞体験が実現できているように思われる。

6. 中学美術と美術館の連携の方向性

美術館に出向き、展示されている作品を鑑賞し、感想を言葉にするといった活動は、実際にはその実現がなかなか困難である。その理由の一つは学校の近くに美術館がないことや、近くにあっても移動のための交通手段がないといった地理的環境の問題、もう一つは中学校の授業は教科ごとに担任が異なるため、特別な時間の設定が必要な活動や、校外への移動を伴う活動の実施はかなり難しいという時間割上の問題である。

仮にそうした物理的な問題が解決できても、さらに美術教員自身の問題もある。美術館における鑑賞活動を計画する際、往々にして見られるのは、何か面白い展覧会がないか、美術館側が提案してくれるワークショップなどの企画がないかといった取り掛かりである。その結果、当日は生徒たちを「引率」し、作品にさわらない、大騒ぎしないといった注意事項を「指導」し、美術館スタッフに解説をしていただき、美術館制作のガイドブックを活用し、鑑賞後に感想のワークシートを書かせるといった活動になりがちである。確かに生徒たちのいきいきと楽しそうに活動する姿や、一人ひとりが書いたさまざまな感想を読めば、美術館における鑑賞活動で生徒たちがたくさんの知識の習得や豊かな心の体験ができるよさは明らかだが、受身で消極的な感じも否めない。

こうした背景には、教員が美術鑑賞を学ぶことなく大学を卒業している¹¹ためにイメージが湧いていないことや、教員の研究不足、企画力不足といった問題が考えられる。さらに、美術館を活用した鑑賞教育の先行実践事例を共有する機会や方法が乏しいという問題もあるだろう。いずれにしても、これまでそうした取り組みの試行や経験をする機会が少ない教師が多いことが予想できる。

しかし、これまで見てきたように、中学美術と美術館の連携によって、中学校における美術の活動の幅が明らかに広がり、その質の向上が期待されることから、学校と美術館との連携をより広範囲に、継続的に行うことが重要である。それでは、あまり経

験がない学校や美術教員が美術館との連携を図れるようになるためにはどのようにしたら良いのだろうか。

美術館が企画する研修会や教員対象の無料鑑賞ウィークなどを活用することは、そうした現状に対する取り組みといえるだろう。例えば、北九州市立美術館では、2006年度の鑑賞のしかたを学ぶことをねらいとした展覧会を開催した際に、学校と行政と美術館の三者で構成された委員会で「ティーチャーズガイド」を作成している⁷。ガイドを一緒に作ることで、それぞれの経験を共有することができるだろう。ただし、これは特定の展覧会についてのガイドであり、継続的に使用することは難しい。そういう意味では常設展示の作品と活用することが望ましいであろう。

また、授業案（あるいは事業案）を共有する際に重要なことは、その題材を設定した意図、その題材を通して生徒にどのような力を養わせたいかという意図を双方が明確にすることである。先行事例をただ単純になぞっても、その意図が分からなければ仮に形ばかりは授業が成り立っていても、授業のねらいは達成されない。悪くすると全く逆の効果を上げてしまうかもしれない。

先に示した岡山県美術館と学校の連携の場合では、パッケージ「アート・トラベリング・トランク」をあくまでも素材ととらえ、それらの素材を使いこなすために、「学校と美術館の連携委員・ミュージアム特使（ハブ教員）」を養成している。そのようにして、企画力の養成もあわせて支援しているのである⁹。

このような方法は今後の方向として一つの可能性を示してくれる。しかし、このようなシステムは他の地域でもすぐに構築されるのは難しいかもしれない。

そこで、本稿では最後に、美術館の常設展示の作品を使った実践事例やその授業案を共有する方法として、美術館に先行事例の情報をストックする可能性について考察してみたい。ストックされる情報は、それを見た教員の授業を企画することに役立たなければならないが、どのような条件を満たしている必要があるだろうか。

第一に、計画を立てる際の前提として、「どの学校でも実践できる」という視点を決めておく必要がある。実施時期や、移動手段、授業時数との関係といった各学校の事情、あるいは個々の教師の経験差はもちろんあるが、少なくとも学習活動の内容については、基本的にどの学校の、どの先生でも「授業で行える」「美術館に行けば行える」ことが必要であろう。

第二に、実践される活動について、その活動のねらい（学習目標）を明確にしておく必要がある。ねらいが明確であれば、具体的な実践方法については各教師が生徒の実情に合わせて工夫をし、改善をしていくことが容易にできると考えられる。

第三に、鑑賞活動が表現活動と関連づけられる必要がある。それは、表現から鑑賞、あるいは鑑賞から表現という単線的な方向だけでなく、表現→鑑賞→表現、鑑賞→表現→鑑賞など様々な方向性や発展性が考えられたほうがよい。単元単位の関連付けだけでなく、それぞれの活動の中で他方の活動が行われることも考えられるだろう。

こうした条件については、各学校間で情報交換や意見交換を行う組織や場が必要であり、その際、美術館の担当者がアドバイザーとして加わることが望ましいだろう。

註

- 1 上野行一の試算によると、国民一人あたりの利用状況は年に約0.45回にしか過ぎず、熱心な愛好家や年に何回も訪れるリピーターなどの存在を考慮すると（上野行一『私の中の自由な美術』光村図書、2011年、p.45）、1回以上利用した人の人数はかなり少ないと言わざるを得ない。
- 2 一條彰子「美術館から見た学校－美術館連携－」（大坪圭輔、三澤一実『美術教育の動向』武蔵野美術大学、2009年、pp.231-238）、pp.231-232。
- 3 奥村高明「創造的な行為としての鑑賞」独立行政法人国立美術館『平成19年度 美術館を活用した鑑賞教育の充実のための指導者研修』平成19年11月、pp.20-33。奥村は、学校が美術館に任せっぱなしになるのは「外注」であり、教員が責任を持っていないし、美術館側も入館者増をねらっているならば、子どもをみていない。「子どもは鮭じゃない」のだから来館するだけでは大人になっても美術館を利用するわけではないことを指摘している。

- 4 前掲『私の中の自由な美術』p.39、p.50など
- 5 対話型鑑賞のアメリカ・アレナス『Mite!ティーチャーズキット1～3』（淡交社）やアートカードなどの教材も出ている。対話による鑑賞は、学芸員等のコーディネートによって、作品を自分たちの言葉でどのように表現するかを考えさせて、話し合わせる方法である。
- 6 前掲「美術館から見た学校－美術館連携－」、p.232。
- 7 北九州市立美術館「北九州市立美術館を活用した学習プログラム：見つめる感じる考える：鑑賞学習指導資料」2007年などを参照。
- 8 金沢21世紀美術館HP「学校連携事業」http://www.kanazawa21.jp/data_list.php?g=31&d=6（2013年10月参照）、金沢21世紀美術館「まるびいアートスクールvol.2 報告書」2007年など。
- 9 「アート・トラベリング・トランク」については、岡山県立美術館の<http://www.pref.okayama.jp/seikatsu/kenbi/art-traveling-trunk.html>（2013年10月ダウンロード）を参照。岡山県立美術館と学校の連携については、山本健二、赤木里香子、大橋功「岡山県立美術館 学校と美術館の連携委員会」の戦略と成果：伝統文化の学習支援プロジェクト：「スゴ技ながもち」とハブ教員」日本美術教育学会、『美術教育2013(297)』2013年、pp.34-42など。その他の事例については、文化庁の「美術館・歴史博物館活動基盤整備支援事業」を受けた事業概要（http://www.bunka.go.jp/bijutsukan_hakubutsukan/shien/ 2013年10月ダウンロード）を参照。
- 10 詳細は、不動美里、黒澤浩美、平林恵、木村健、西澤明「現代美術作品の鑑賞教育プログラム」（石川誠、竹内晋平編『2010美術科教育学会地区研究会〈フォーラムin京都〉美術鑑賞の問題－みる・つくる、そして状況－』（発表概要集）鑑賞教育研究プロジェクト、2010.12.18、pp.4-11）を参照。
- 11 前掲『私の中の自由な美術』p.39。

参考文献

ロンドン・テートギャラリー編、奥村高明、長田謙一監訳『美術館活用術～鑑賞教育の手引き～』美術出版社、2012年
 アメリカ・アレナス（木下哲夫訳）『みる かんがえる はなす 鑑賞教育へのヒント』淡交社、2001年 他

（くわむら・さわこ 一般教育等／教育学）
 （にしざわ・あきら 金沢大学附属中学校教諭／美術）
 （2013年10月31日 受理）

